

idea

ニュースレター「アイデア」

2023.3

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 田河津地区教育振興運動実践協議会 会長 高橋 勝男さん(後編)
- 3 | 団体紹介 | 高橋東阜顕彰会
- 5 | 地域紹介 | 関が丘第2民区(一関)
- 7 | 企業紹介 | 印章の店 千印社(千厩)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴②「農村RMO」の出現
- 9 | センターの自由研究 | 暮らし調査ファイルNo.21「年(歳)神様の迎え方①」

今月の表紙

一関市巖美市民センターの敷地内にある旧鈴木家住宅に設置された「鳥居型門松」。「伊達藩の行儀見習い人(小笠原流)が達古袋に来たことで、この門松が一関で広がった」という話もあり、「伊達藩門松」と呼ぶ人も。ところで、「門松」の設置目的をすぐに答えられる人はどのくらいいるのでしょうか？(自由研究) ※この門松は令和4年12月26日に設置され、市内小学校の社会科学習用にと、令和5年2月9日まで飾られました(2月8日撮影)。

idea 発行 いちのせき市民活動センター 千021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415 ホームページ: https://www.center-i.org/ メール: center-i@tempoon.ne.jp

お知らせ

情報

「姿勢と健康」講座 出張依頼承ります

姿勢は健康と密接な関係があります。「KCSセンター一関」では、姿勢と健康について、大学専門課程を修了した「姿勢の専門家」による出張講座を行っています。

「正しい姿勢とは」「姿勢と痛みの関係」「どうして姿勢が悪くなるのか?」「姿勢の直し方」など、すぐに実践できる内容が多く、教育機関や公共施設、企業や地域のサロンなどの事業(講座)としてもご利用いただけます。講座の詳細は下記までお問い合わせください。

内容: ・姿勢と健康の関係
・「ピンピンコロリ」と姿勢の関係
・子どもの姿勢と健康 など
問合せ: 0191-48-3710
(姿勢専科*KCSセンター一関)

募集

「チーム+心」一緒に活動する仲間を募集

援助や配慮を必要としている人が身に付ける「ヘルプマーク」を軸に、障がいに対する理解促進等を図るための活動に取り組む「チーム+心」では、一緒に活動する仲間を募集しています。主な活動は、市内イベントへの参加、自主企画の展示会開催などです。居住地、性別、年齢等は不問。同会の活動に興味を持った方、「私も力になりたい」という方は、下記までお問い合わせください。

活動日: 定例会等はなく、イベント等に合わせて随時活動
会費: なし
※実費負担が伴う場合あり
問合せ: 090-2028-0560(浜田)

イベント

狐禅寺KMYプロジェクトイルミネーション点灯

狐禅寺地区の「KMY(狐禅寺・みんなして・やっべし)プロジェクト実行委員会」の「狐禅寺未来図会議部会」では、一関市立狐禅寺幼稚園閉園に合わせたイルミネーションイベントを開催します。会場内には、在園児が描いた絵入りペットボトルツリーなどが飾られ、閉園となる幼稚園を明るく照らします。※一関市元気な地域づくり事業、地域こども思い出づくり支援金を活用。

期間: 令和5年2月25日～3月20日
点灯時間: 16時～20時
会場: 一関市狐禅寺市民センター・一関市立狐禅寺幼稚園の前庭
問合せ: 0191-21-2155
(一関市狐禅寺市民センター内)

情報

結いネット そげい 公式ホームページ開設

大東町・曾慶地区の地域協働体「結いネット そげい」では、令和4年12月1日より公式ホームページを開設しました。

ホームページ内には曾慶地区の概要やニュースのほか、地域協働体のビジョンや組織体制、事業紹介(農機バンク等)などの情報が掲載されています。

※右のQRコードからもご覧いただけます。



HP: https://www.yuinet-sogei.com
※「結いネットそげい」で検索しても上位に表示されます。
問合せ: 0191-75-2244
(一関市曾慶市民センター内)

情報

「むろねの賛笑漬」道の駅むろねにて販売開始

一関市室根町の地域協働体「室根まちづくり協議会」の産業振興部会内「室根特産品開発プロジェクト」が開発した“食べる調味料”「むろねの賛笑漬」が令和5年1月21日より販売開始されました。同商品は、唐辛子でできた三升漬をベースに、菊芋・ごぼう・にんじん・しその実が食感と旨味を引き立てます。

味は「ピリ辛」「鬼辛」の2種類から選べ、同町の「道の駅むろね」で購入可能。商品に関する問い合わせは下記まで(在庫状況は道の駅へ)。

金額: 1瓶(100g)税込500円
問合せ: 0191-64-2347
(一関市室根市民センター内)

講座

令和4年度 まちづくり入門講座

「まちづくり」に興味・関心のある市民や、実際に関わりのある地域協働体の職員等を対象に、「地域づくり」「地域おこし」の違いを整理し、それぞれにおける「視点」を考える講座を開催します。電話かホームページ内申込フォームからお申込みください。

日時: 令和5年3月25日(土) 10時～15時(昼休憩あり)
場所: なのはなプラザ4階共同会議室
講師: 小野寺浩樹
(いちのせき市民活動センター長)
参加料: 無料
定員: 15名(3月17日までに申込・先着順)
問合せ: 0191-26-6400
(いちのせき市民活動センター)

まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名 「剥き出しの梁の意外な歴史」



一関修紅高等学校の武道館の天井。昭和31年に講堂として建てられたもので、昭和61年に現在の場所に移築されました。平成30年に耐震補強工事で行った天井を剥がしたところ、このような梁が出現！工事関係者(1級建築士)からも「珍しい梁だ」と驚かれたそうです。



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	54597	-76	24499	-16
花泉	12130	-28	4705	0
川崎	3266	-17	1278	-8
千厩	9924	-22	4109	-3
大東	12045	-28	4910	-4
東山	5926	-5	2275	-2
室根	4418	-19	1773	-4
藤沢	7186	-22	2791	-10

一関市全体		前月比
人口	109492	-217
世帯数	46340	-47
出生数	43	13

168 / 109,492

高橋勝男

「田河津地区教育振興運動実践協議会」の会長であり「東山地域教育振興運動推進連絡協議会」の会長も担う。子どもの入学を機にUターンし(当初は単身赴任)、平成8年度に田河津小学校(当時)のPTA会長を、その後も旧東山町の教育委員を務めるなど、地域住民の立場で教育の現場に携わり続けてきた。昭和33年生まれ、東山町田河津出身・在住。



令和5年1月に田河津地区教育振興運動実践協議会らが開催した「多幸☆ちいさな雪まつり」の様子

第104回 田河津地区教育振興運動実践協議会 会長 高橋勝男さん × いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

子どもたちを「人間として教育する」 ～次代のリーダーを育てるために【後編】～

旧東山町は28の行政区に分かれますが、子ども会組織は22(令和5年2月現在)。教育振興運動は3つの実践区(長坂、松川、田河津)で推進され、田河津地区が独自で組織していた「田河津地区教育振興運動実践協議会(以下、田河津教振)」は解散予定です。少子化の影響で、地域における「子どもの教育」が新たなフェーズを迎えつつある今、私たちが改めて持つべき「視点」とは？(2回シリーズの後編)

小野寺 田河津教振が始めた父母の会の活動発表会が、今は東山地域に広がり、子ども会による活動発表が毎年行われていますが(前編参照)、そもそも「子ども会」と「父母の会(育成会)」を明確に分けていることが今では珍しいなと感じます。

高橋 東山地域では、行政区毎に「子ども会」と「父母の会」もしくは「育成会」を置いたままのケースが多いと思います。ただ、「子どものための、子どもが運営する子ども会」という位置づけではなくなくなってしまったところも多いでしょうね。

小野寺 そこが気になっていて、最近では「子ども会」と言いながら、実態は「子ども会育成会」だったりしますよね。意味合いが全然違うのに、同じ扱いにされてしまっているのが、どうも引くかかると感じます。

高橋 子どもが多い時は、高学年の子どもを中心として、夏休みがたい」という発言。素晴らしい会議でした。

高橋 田河津は10年程前に小学校がなくなり、令和4年には児童館がなくなってしまう、地元の子どもたちがどこでどんな活動をしているのかを把握できるような接点がなくなってしまうんです。児童館があつた頃は、田河津市民センターの高齢者教室と児童館の子どもたちが一緒に運動会をしたり、婦人会さんの協力をいただいて夏祭りみたいなことをしたりね。そういう田河津の伝統のようなものが無くなってしまったので、子どもたちと一緒に行事が楽しみなんだと思います。

小野寺 地域と子どもたちが向き合える状況を模索しながら、動き続けているというのが素晴らしいです。

高橋 今日の会議は教振の会議でしたが、同じ構成員で田河津振興会(地域協働体)ができたわけですから、教振は振興会に移行して、その中の一つの部門や部隊として、社会教育事業を担ってあげれば良いんじゃないかと思っています。

みの行事の計画、冬休みの行事の計画っていうのを子ども会として立ててたんですね。

高橋 今の時期だとクリスマス会や正月行事とかね。でも子どもの数が減ってきてしまい、話し合いも成り立たなくなると、どうしても育成会とごちゃ混ぜになってしまつて。せめて子どもたちがやりたいことがあつて、それを親がバックアップするのなら良いんですが、どうも親の敷いたレールというか……。

小野寺 「子ども会」って、子どもだけで純粋に運営ができていた時は、自治会の子ども版のような存在だったはずなんです。行政などが介入しない、純粋な住民領域のものであつて。

高橋 確かに「子ども会」が子どもの手だけで運営できればこれ以上のものはないですけど、

小野寺 少子化や学校統合、そして新たに国が進めているコミュニティ・スクール^{※2}などによつて、教振そのものが解体されつつありますが、協働体ができただけで、そこに教振が担ってきた機能を吸収させることができるわけですね。

高橋 そうですね。振興会(協働体)の中に入ってしまった方が機能しやすいです。今は協働体が地域の生涯学習や社会教育を担う責任を持つという流れになっていますから。

小野寺 理想だと思っています。ちゃんと歴史がありつつ、時代に合わせて変化していく。筋書きはちゃんとあるわけですよ。子ども会と父母の会(育成会)と一緒に活動することも、状況に合わせて進化を遂げていると捉えられますし、協働体のような補完の形でもありますね。

高橋 子どもや親がどういう活動をしたいか、それに対してどう応援できるか、というシンプルなことであれば、末永く続いていくんだと思います。それぞれの立場で、次代を担う子どもたちを育てていきたいですね。

行政区では成り立たなくなつたために広域になると、子どもたちだけで集まれるかという問題になる。そうするとどうしても親が関わってきちゃうんです。

小野寺 我々の頃だと学校の中で子ども会毎に集まつたりしましたが、今は学校も広域になり、先生たちも余裕ないですもんね。

高橋 なので隣の行政区や3つの行政区が一緒になつて活動したら良いんじゃないかという話もありますし、田河津でも実際に隣同士一緒に活動している子ども会や父母の会があります。

小野寺 先ほど同席させていただいた田河津教振の会議の中で、各父母の会代表者たちが口々に「個別の子ども会活動ができないので、田河津全体の子ども行事を企画してくれるのはありがたい」と発言されていましたね。

高橋 やっぱり活動の中心は子どもたちです。子どもたちがいかに幼少期や小学校時代を楽しんでいく地域の中で育んでいけるかというところを考えた時に、組織うんぬんではなく、一緒になつてみんな経験するっていい

うことが大事になると思うんです。自治会と子ども会の関係性もあるとは思いますが、私はほとんど一緒に活動する方法を考えて良いと思つてます。

小野寺 印象的だったのが、子ども会自体の統合を考えるよりも、田河津全体で行う事業を考えていく方向性の方が良いのではないかという発言。「どこどこがくつつく、という話よりどうせ24人しかいないんだから、今いる子ども全部で何かやれば良いんじゃない?」って、すごく良い提案でしたよね。

高橋 妥当だなと思つたよね。昔は各自治会にそれくらいの子どもがいたわけですが、全体でも24人なら、各子ども会組織は残しつつ、一緒に活動するという方向性はありですよな。

小野寺 田河津教振の構成員として参加されていた婦人会や老人クラブさんも、子どもと関わる機会が減つたからと「喜んでイベントには協力します」という発言でしたし、そこに対して父母からも「婦人会なども巻き込んだイベントが年に1回でもあれば地域の繋がりがりもできてあ

※2 文部科学省が進める「学校運営協議会制度」のことで、学校と保護者、地域住民がともに知恵を出し合い、学校運営に意見(地域の声)を反映させることで、「地域とともにある学校づくり」「特色ある学校づくり」を進めていく仕組み。

※1 令和4年12月15日に田河津振興会との共催で開催された「イルミネーション事業『夢灯り』打ち合わせ会議」。田河津地区内の各父母の会長等のほか、東山小学校PTA会長、田河津振興会関係者、地区婦人会、老人クラブの代表者などが参加した。

団体紹介

高橋東臯顕彰会
 平成30年3月発足。同年11月に開催した「高橋東臯二百年祭」の実行団体として発足し、その後も「高橋東臯」の功績を語り継ぐことを目的に活動を継続。現在は事業ごとに協力者を募って活動している。

住所：一関市藤沢町藤沢字仁郷12-5
 (一関市藤沢市民センター内)
 TEL：090-5230-5103(事務局長・鈴木)

写真：「高橋東臯俳句大会」で「はづき句会」会員と撮影した集合写真(令和元年)



偉人「高橋東臯」の志を後世へ

藤沢で語り継がれる俳人・書家「高橋東臯」

宝暦2年(1752年)、現在の藤沢町藤沢に生まれた高橋東臯。幼少期から勉強家で、少年時代に俳諧(俳句)を西村聴雨(現在の千厩町千厩出身)の下で学びます。後に書道(菅原南山(現在の宮城県栗原市金成出身)の下で学びます。後に与謝蕪村の弟子として俳諧の腕を磨き、その才能が認められ「春星亭」の俳号を授けられます。春にウグイスが鳴く様子を表現した「鶯の聲滑に丸く長し」など、眼前致景の手法が用いられるのが東臯の句の特徴で、書道では『独樂園記』『六体書』など数々の作品を揮毫し、独自の書風「東臯流」を確立。「遂志(遂げんかな志、やろうと決めたことはやり通す)」という書の通り、生涯現役を貫いた東臯は、文政2年(1819年)、「只置けばよいよ寒し左の手」という句を遺して68歳で他界しました。

とうこう 高橋東臯顕彰会

語り継がれ、近代においては県外の俳人・書家の間でも「みちのくの蕪村」として知られるように。当地域では昭和15年に「子孫の高橋篤四氏を中心として」「120回忌追善句会」を開催。以後、当時の藤沢町教育委員会や史談会、公民館等が、東臯の顕彰活動(俳句大会や識者による研究発表等)に取り組みしました。

※1 松尾芭蕉、小林一茶とならんで江戸時代の俳諧三大巨匠の1人
 ※2 「目の前にくつきり」とその風景がみえるよつこ」という意味

百年に一度の節目

没後200年を控えた平成29年、今まで東臯の顕彰に関わってきた団体の間では「二百年祭記念事業」に向け、郷土の偉人を称えるために「がんばろう」との機運が。そこで、同町の「はづき句会」会長の菅原清信さんが中心となり、二百年祭記念事業を進めていくための団体立ち上げに向けて動き出します。

町内の各種団体に声をかけ、平成30年3月、二百年祭記念事業の実施及び、東臯の功績を学び、後世に伝えることを目的とした「高橋東臯顕彰会」が発足。藤沢町史談会の会長として東臯の生涯や俳句・遺墨について研究・講演などもしてきた及川成一さんを会長に、町内の芸術文化関係者らで記念事業開催に向けて準備を始めたのです。

記念事業は「二百年祭記念式典」のほか、俳句大会、書道展、記念講演、東臯の遺墨や研究者等の作品や資料の展示、記念誌『高橋東臯二百年祭記念誌』の発行など、地域住民にとっても東臯の生涯や功績に触れ、「藤沢の偉人」を再認識する機会となりました。

また、現在も毎年3回程行っている東臯の句碑周辺(藤沢町藤沢「館山公園」内)の整備は、二百年祭を機に始められたもので、同会と地域住民が協力して実施。東日本大震災以降倒れていた東臯研究家で俳人の室積徂春の句碑も同会役員・協力者によって移設されました。

これから生きる人たちへの「遂志」

二百年祭終了後、俳句選者の一人から「この祭典が終わって、数年のうち

に活動が途絶えてしまつては顕彰会の意味がない」との助言を受け、記念事業終了後も東臯の顕彰活動を継続することに決めました。

主要事業である「高橋東臯俳句大会」は東臯が築いた俳句文化の伝承を目的に開催。令和4年度は全852句もの応募が！及川さんは「二百年祭以来、藤沢地域のみならず皆さんが東臯のこと、俳句のことに関心を持ってきている」と手応えを感じています。

「いつかは子どもたちを対象に講演をしたい(令和2年に中学生への講演を企画していたがコロナ禍で中止)」。東臯は書家としても有名なので、書道展の開催も考えています」と今後の展望を語る及川さん。「これからの藤沢地域を考えると、高橋東臯などの偉人はもちろん、この地域の史実や歴史背景をみんなが学ぶ必要があると思えます」と続けます。

事務局長の鈴木求さんも「自主財源の確保(設立から3年間は「一関市地域おこし事業費補助金」を活用)など課題は多いですが、なにより東臯のことを語り継いでくれる後継者の育成に挑戦したいと思っています」と意気込んでいます。

令和2年には一関市立藤沢中学校へ遺墨「遂志」のレプリカを寄贈した同

Q.今後の目標(遂志)は？

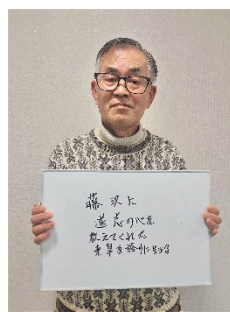
会長



おいかわ せいいち
及川成一さん
 教員を退職後、藤沢町史談会にて約10年活動し現在は顧問へ。俳句愛好家の祖父の元で育ち、東臯の有名な句を詠みながら通学した思い出があります。

A. 子弟愛、近隣愛に生きた東臯をさらに深めていきたいです

事務局長



すずき もとむ
鈴木求さん
 12年前に「はづき句会」への加入を機に俳句を始め、東臯が身近な存在に。顕彰会では事務局として記念事業を進め、平成31年に事務局長に就任しました。

A. 藤沢に遂志の心を教えてくれた東臯を誇りに生きる

- Photo

gallery -



二百年祭準備作業の様子。事前会議、東臯直筆の遺墨の調達、俳句・書道作品の募集など1年以上かけて準備が行われました。

二百年祭に向けて



高橋東臯の句碑
 館山公園内にある東臯の句碑。研究家有志によって昭和13年に建立され「鶯の聲滑に丸く長し」の俳句が刻まれています。



句碑への道標
 令和3年、句碑がある館山公園を来訪する人のために設置した案内板。地元有志と協力し公園内外約10か所に設置しました。



住民を見守る「遂志」
 一関市藤沢市民センターの2階ロビーに展示されている東臯の遺墨実物大レプリカ。本物は市内の個人が所有しています。

関が丘第2民区(関が丘)
 行政区は「関が丘2区」。198世帯415人(15班体制)が暮らす。区長、監事、総務部、環境厚生部、自主防災推進部、会計部で構成され、オブザーバーとして民生児童委員、保健推進委員とも連携。



左の写真：敬老会の集合写真(令和元年)

「お互い様の心」で取り組む災害への備え

団地造成で誕生した「関が丘第2民区」

関が丘第2民区は、関が丘団地の北東側に位置します。同団地は、岩手県住宅供給公社(当時)によって昭和43年頃から造成が進められた団地で、人口5千人規模の住宅団地となる計画でした。昭和45年頃から入居者の受け入れが始まりますが、その最初の入居エリアに位置した行政区が関が丘2区です。行政区の誕生は昭和45年頃で、行政区長の推薦を要請されたことをきっかけに同民区(非自治会)が結成され、最大時は251世帯約850人が暮らしていたのだとか。区長の小松原久四郎さんは、「団地には近隣市町村からも入居の応募があった。当時はお互い知らない人ばかりだったが、関が丘体育協会が企画するスポーツ大会で住民同士がコミュニケーションを取っていた」と振り返り、「スポーツ大会をきっかけに、20〜40代を中心に野球部同好会やママさん・パパさんバレーなどのチーム

関が丘第2民区

一関

が発展的に民区内で結成され、活気に満ちていた」と笑顔で当時の様子を語ります。しかし、現在の住民数は最大時の半分以下となり、団地完成後に開業した商店や理容店などの店舗も経営者の高齢化等の理由によって廃業し、空き家の数も増え続けています。そんな課題等から住民を守るため、同民区が力を入れるのが自主防災の取り組みです。

ここに住む人々が安全・安心に暮らすために

同民区では、防災訓練や防災セミナーのほか、80歳以上の世帯及び75歳以上の一人暮らし世帯を訪問する防災巡回訪問などを「関が丘第二民区自主防災会(以下「自主防」)」と連携し、実施しています。自主防の会長、副会長、事務局長、情報部、避難救出救護部は民区役員が兼任し、専任防災委員は班からの選出、防災委員は班長が担う仕組みです。自主防自体は平成21年の発足で

すが、「誰が誰を支援するのか」など、有事の際の役割が確立されないまま東日本大震災が発生(平成23年)。残念ながら自主防が十分な活動をしたとは言えない状況でした。そこで平成25年、「いつ何時に、東日本大震災のような大震災が住民を襲うかわからない」と、自主防の在り方を見直すべく民区役員たちが奮起。検討を重ね、平成28年に現体制へと整えたのです。

体制の見直しと同時に行ったのが仮避難場所の設置。同民区は坂道が多く、高低差のある土地を高齢者や障がい者が指定避難所まで歩いて避難するのは困難だと考え、民区内の公園や空き地、保育園駐車場などを独自の仮避難場所(6か所)としたのです。これにより、避難者の安否を仮避難場所を確認してから指定避難所へと誘導する体制となり、「他人事ではなく、お互い様の心で支えられる体制ができた」と、自主防災推進部長の佐藤一十さんは同民区独自の自主防の仕組みを評価します。

また、平成28年には「要支援」「避難済」と表記された避難表示プレートを各戸に配布し、「要支援」のプレートが掲げられた家があれば近隣住民で避難の支援をするという仕組みも構築。さらに、緊急搬送時に救急隊員などに見せる「緊急連絡カード」も全戸に配

布。かかりつけ医や病気の有無、緊急連絡先等を任意で記入する項目が設けられており、玄関や電話付近に保管するよう住民に促しています。実は平成25年当時も区長を務めていた小松原さん(令和3年から2度目の区長)は、「最初から上手くいったわけではなく、試行錯誤と話し合いを重ね、現体制に成長してきた。日頃からの備えが、みんなの健康と安否確認の一助となっているので、これからも自主防に主力を置いていきたい」と語ります。

持続可能な体制のための、独自のルール

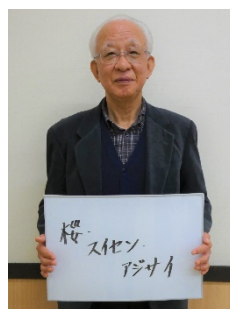
区長・民区役員が長期に渡って再任される状況から、民区内を4ブロックに分け、1期交代で各ブロックから輪番で選出する仕組みとしていた同民区(平成13年頃から)。近年はこの体制にも難が生じてきたため、令和3年の改選からはブロックをA・Bの2つとし、班長会議を中心に次期区長候補を選出する仕組みに修正(再構築)しました。

また、一般的に1年交代が多い班長も、負担なく続けられるよう、半年交代にしており、班長交代時には新・旧班長が揃う「班長引継会」を実施し、業務を対面で引き継いでいます(同様に

役員の引継会も有り)。わずか50年強の歴史の中で、独自の支え合いの仕組みを構築してきた同民区。様々なルーツの住民が暮らす団地民区だからこそ、「お互い様の心」で、住み良い地域を目指します。

Q. 集落の自慢は何ですか？

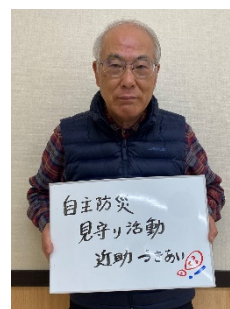
区長



A. 桜・スイセン・アジサイ

こまつばら きゆうしろう
小松原久四郎さん
 昭和48年に同団地に移住。区長は累計4年目で、自主防災推進部長を担っていたことも。若い頃にはママさんバレー等の監督・コーチもしていました。

自主防災推進部長



A. 自主防災・見守り活動・近助つきあい

さとう かつぞう
佐藤一十さん
 昭和49年に同団地へ移住。同推進部長になる前は区長を2期務めました。誰よりも自主防の取り組みに力を注いでいます。

- Photo

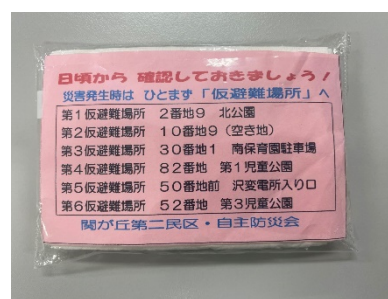
gallery -



「スポ・レク交流会」
 住民同士の交流機会として、日帰り研修旅行などを企画。毎回20〜30名の参加があります(写真は令和元年)。



民区で維持・管理
 民区内には桜やスイセン、アジサイがキレイに咲き誇るスポットがあり、地域の宝として大切に手入れをしています。



日頃から意識すべく
 令和4年度からポケットティッシュに仮避難場所を記載した紙を挟み込み、高齢者などへ配布。意識啓発を行っています。



全世帯対象の防災訓練
 毎年10月に行う防災訓練では、実際に仮避難場所と災害本部を開設し、避難経路を再確認します(写真は平成28年)。

千厩 印章の店 千印社

昭和38年、藤沢町黄海出身の千葉貞穂さんが千厩町新町にて開業。「はんこ」を製造販売する「印章店」で、令和5年で創業60年。昭和48年に現住所へ店舗を移転し、平成12年からは二代目とその技術を継承しています。

いわゆる「はんこ」の正式名称は「印章」で、生業としては「印章業」。印鑑登録制度や、認印をはじめとする印章の適切な管理の必要性など、印章に関するあらゆる情報の発信、周知を行う「公益社団法人全日本印章業協会」の岩手県唯一の会員店舗です。安価で気軽に印章が手に入る時代に、同店では手彫り印章の技術を継承すべく、次世代に繋ぐ活動も積極的に行っています。

「唯一無二」の自分の証・決意の証を手仕上げで

時代の変化が反映される「印章」の需要

ペーパーレス化やオンライン化が推進され、使用機会が減少しつつある「はんこ」ですが、日本独自の「印章文化」があったことを忘れてはいけません。「漢委奴国王」の金印から始まり、江戸時代には行政上の書類のほか私文書にも印を押す慣習が広がるなど、印章は現実社会において重要な役割を果たす「個人証明」の一つです。

「はんこは個人の責任や経営者としての信用を証明する分身のようなもの。その人を支え守ってくれるはんこには、同じものがあつてはなりません」と語るのは、「千印社」の二代目・千葉寿幸さんです。創業者である父の貞穂さんは、中学3年時に授業で体験した「はんこづくり」がきっかけで、地元の高校卒業後(昭和32年)、印章生産量全国一の山梨県で印章の修行を開始。25歳で修行を終え、千厩町新町にて昭和38年に店舗を構えました。印章業は就職や進学等、人の移動がある1月〜3月の時期が繁忙期。保・幼・学校等で使用する氏名印(ゴム印)も製作しているため、「児童生徒数が多い時代には睡眠時間が

2時間程度しか確保できないこともあつた」と振り返る貞穂さん。二代目の寿幸さんがUターンした平成12年時点では、岩手県印章業組合に加盟している県内の印章業者が37店舗ありましたが、現在は15店舗に減少しており、「児童生徒数やインターネットの普及による需要の減少など、時代の流れも感じる職業です」と続けます。

手作業だからこそその唯一無二

お客様に指定された印材(柘、牛の角(白・黒)、象牙)を用い、お客様に指定された書体を手彫り(または一部機械化)した「木口(認印や実印など)」と、企業や学校等で使用される「ゴム印(スタンプ)」の2種類に大きく分けられる「はんこ」。昔のゴム印は活字を組んで型(凹凸)を作り、ゴム部分とプレスする工程があり、「今よりも作り方に手間がかかった」のだとか。



- 1 実際に手彫り印章を行う、二代目の千葉寿幸さん。
- 2 二代目は一級印章彫刻技能士のほか、書道師範でもあります。
- 3 店内では印章のほか、認印や印鑑ケースなども販売中!

DATA
〒029-0803
一関市千厩町千厩構井田無番地
TEL 0191-52-2475

「今でこそ機械化になった部分はありますが、父の代は本当に職人技。印稿(印章の原稿)の作成、印面の修正、字割付、字入(布字)、荒彫り、印面直し、仕上げ、という7つの工程が必要で、手仕事そのものです。『手づくりのはんこは高い』と言われますが、それはごもつとも。お客様から見ればどれも同じに見えるかもしれませんが、手作業で製作する印章は同じ苗字でも一つ一つ技術本位で『唯一無二』のものになるので」と、寿幸さんは続けます。

一級印章彫刻技能士であり、岩手篆刻協会副会長、岩手書道協会審査会員(書道師範取得)など、印章に関する各種協会等の役員も担い、その技術継承にも尽力する寿幸さん。「篆刻講座」や、「篆刻実演」など、地元のイベント等でも印章に触れる機会を提供しています。今後も各種体験活動等を通じ、印章を身近に感じてもらうとともに、日本の「印章文化」を刻み続けます。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴⑳
「農村RMO」の出現



博識社の
フクロウ博士

第48話

「縦割り」で乱立!? 「地域運営組織」を取り巻く現状

「RMO(Region Management Organization=地域運営組織。一関市で言う「地域協働体」)」の仕組みの必要性が叫ばれ、全国的になかなかの勢いでRMOの設立が進んで(進められて)います。従来の地域内の関係性によっては、必ずしもRMOを設立しなければならないということではなく、RMOが無くても運営できるのなら設立の必要はないはず。

しかし最近では、RMOを設立することが目的化しているように見え、違和感を感じてしまいます。大事なのは「設立」ではなく「機能」です。どう機能するか、そして、どのように協働していくかが議論され、RMOがすべきことが明確にされていないと、設立してもRMOが困るだけでしょう。

一関市では、「協働基本計画」と「地域協働推進計画」によって地域協働体の設立目的と機能(目指すもの)が定められ、地域ごとの状況に合わせて設立を進めてきました。そして、「地域づくりと学びの一体化」を目指し、「地域づくりの拠点」として、地域協働体による市民センターの指定管理運営も始まり、新たな一歩を踏み出したのです。

ところが!その矢先に飛び込んできたのが「農村RMO」という新語です。地域協働体の必要性を考え、動き始めたところに、農村版のRMOとは、オーマイガー!と感嘆してしまいました。

「RMO(地域運営組織)」は総務省がその形成を推奨しているもの(『第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」(令和元年12月20日閣議決定)』の中で、2024年度までに全国のRMO形成数7,000団体を目指している)である一方、「農村RMO(農村型地域運営組織)」は、農林水産省がその形成を進めているものです。いわゆる「縦割り」を感じざるを得ませんが、地域を見渡せば少子化、高齢化。集落の規模が小さくなり「広域で考えていかなければいけないよ」というお告げだと思いませんか。

では、「農村RMO」が目指すことを少し整理してみます。農林水産省では、農村RMOを「複数の集落の機能を補完して、農用地保全活動や農業を核とした経済活動と併せて、生活支援等地域コミュニティの維持に資する取組を行う組織」と定義しています。具体的なイメージが以下です(農林水産省HP参照)。参考までに、一関市における地域協働体と比較してみます。

農村RMO

- 規模 複数の集落に渡る範囲(例えば、小学校区程度のエリア)
 - 構成員 複数集落による集落協定や、農業法人などの農業者を母体とした組織が、自治会、町内会、社会福祉協議会などの多様な地域関係者と連携して協議会を設立
 - 目的
 - ・「農用地の保全」
 - ・「地域資源の活用」
 - ・「生活支援」
- の3つの事業に取り組む

一関市における地域協働体(RMO)

- 規模 一定の区域(市民センター単位)
- 構成員 自治会(民区・町内会・集落公民館等)や地域の各種団体、NPO、企業など地域から幅広い参画を得る
- 目的
 - ・みんなが話し合う場をつくり、地域の目標を決める
 - ・地域の課題を整理して、安心・安全、福祉、文化、子育てなど必要な取り組みを企画し、地域の中で、又は行政との役割分担により地域づくり活動を展開する

考え方としては、どちらも従来の集落活動の規模を、複数集落に拡大し、地域内の各種団体や住民と連携することで、支え合う仕組みを構築すること。農村部も多い一関市においては、設立当初から地域協働体の構成員に農業関係者(団体)が含まれている地域が多々あるため、農村RMOの要素はもともと持ち合わせていたのです。

改めて農林水産省が「農村RMO」という絵を描いてきたので、情報の受け手としては混乱してしまいますが、「縦割り」で降りてくる情報を、いかに「横に展開」していこうかと考えるのが「現場(≒我々)」であり、情報を整理し、地域側が混乱しないように努めなければなりませんね。

「門松」と「しめ飾り」の「地域性」を探ってみた

実は令和4年と令和5年の2年に渡り、密かに市内各地の「門松」「しめ飾り(縄)」をリサーチしていた我々(正確には2度のお正月)。目視+各地でヒアリング(約40人)も行い、文献調査も加えたところ、ある程度の地域性が見えてきました。

ただし、7頁で説明したように、「年神様をお迎えするための習わし」という認識は薄れており、一つの「慣習」「風習」として、その「やり方」が伝承されているというのが実情。とは言い、「慣習が残っている」という事実も一つの「地域性」と捉え、ご紹介いたします。

神社によってデザイン多様! 年神様の御神像について

当地域にも、年神様の御神像を

神棚等にお祀りする家が多くあります。この御神像は各神社からいただくのですが、その歴史について、花泉町老松の御嶽山御嶽神明社の佐藤宮司は「神社は住民の信仰をサポートする役割。ニーズがあったので神社が御神像を用意するようになったと思われるが、紙の普及が前提なので、早くとも江戸時代以降ではないか」と分析します。

平成24年発行の文献(*)には「近年では環境保護の観点などから都市部を中心に生木の松ではなく門松の飾りを印刷した紙を入口の戸などに張る例も増えている」という記載も。当地域においては、環境保護と言うよりは、松を確保することが難しくなったことが御神像の普及に少なからず影響があることも考えられます。

ちなみに、岩手県神社庁にヒアリングしたところ「確かに門松の代わりに御神像……という感覚もあるかもしれないですが、御神像そのものは依り代ではなく、年神様そのものに近い。門松でお迎えした上で、神棚に御神像をお祀りするのが良いかもしれないが、正解はないので、それぞれの家のお祀りの仕方を大事にしてください」とのことです。



▶ 御神像には『古事記』に記載の男神・オオトシノカミの姿が描かれているものや、松やしめ縄、お供え物などが描かれているものなど様々。



各家に伝わるやり方を大事に! 西磐井と東磐井に見られる傾向



大前提として、年神様の迎え方に「正解」はありません。神社が御神像の祀り方を教えてくれることはあっても、門松やしめ縄に関しては、「民俗学的要素」であり、風習です。『一関市史』にも「門松は家風によって同一ではない。戦国時代の遺制をそのまま家風にしたと思われる」という記載があり、家々で継承されてきたやり方が、集落へと広がっていったものと推測されます。

そのため、地域性というよりも「傾向」程度の表現が近いというのが今回調査の結論ですが、西磐井地域では「牛蒡じめ」と「松の枝を直接供え付ける」というスタイルが比較的多く見られ、東磐井地域では「しめ縄」に「サゲ」や御幣束、松の葉を挟み込んだ「しめ飾り」が多いように見受けられました。また、竹や南天などを松と一緒にする家もありましたが、地域性までは感じられませんでした。

東磐井地域では、この「しめ飾り」そのものを「オドンナ」と呼ぶ傾向があり、御年神様からの派生とも想像できますが、真相は不明です。

「牛蒡じめ」や「しめ飾り」はかつては家・集落などでの手作りだったようですが、現在は市販品を購入する家が多いのが実情。どちらかと言うと東磐井地域の方が、手作りする機会(講座等含め)が多いように感じました。

※調査しきれず、実態は把握しきれいていません。



- 珍しいものをいくつかご紹介!
- ① 水引を結んだ松を神棚の近くに設置(花泉町永井)。
 - ② 「根引松」と呼ばれる、根がついた状態の松に水引を結んだもの。雄松(向かって左)が黒松、雌松(同右)は赤松。京都の旧家などで引き継がれるもの(一関市 ※家の慣習ではなく、いただいたものとのこと)。
 - ③ 海老を模したしめ飾り。気仙沼などに多いらしい(室根町津谷川)。



珍しい

1

2

3

ミッション 75 暮らし調査 「年(歳)神様の迎え方①」

当地域には様々な「お正月の風習」があります。その中で、各家や地域によってその形態や方法に大きく違いがあるのは「松飾り」や「しめ縄」など、「御年(歳)神様(以下、年神様)」をお迎えするための風習です。もはや「年神様をお迎えするための習わし」という意識ではなく「お正月飾り」として行っている家の方が多くなってきていると思われる現代、当地域における実態や地域性の有無などを調査してみました。

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

■門松||御年神様の依り代

「年神様をお迎えする」という習わし(年神様信仰)は、古くから日本全国で行われてきたもので、当地域では「オト(ト)シナ」「オトシガミ」などと呼称します。年神様をお迎えすることは、「新しい年の福を授けていただく」とともに、「当地域では年神様を穀物神と考えることも多く、豊作祈願の意味合いもあつたようです。」

年神様は「松」を目印にやってくることで、この年神様を家の中にお迎えすること、福を授けてもらうのです。そのため、家の入口や門に松を取り付け(門松)、年神様の依り代とします。

古くは杉なども用いられていましたが、次第に「神が宿る木」と考えられていた松に限られるようになり(農村では平安時代末期から)。松は門前に左右一対「並べる」のが一般的で、向かって左側の松を雄松、右側を雌松と呼びます。現代のような玄関前や門前の左右に一対「立てる」ようなタイプは江戸時代頃からのようです。

当地域の一般家庭では、古くから門松と称し、「シノ杭(杉の木)2本の回りを、割った栗の木で巻きしめ、縄を張った(舞川地区)」、「松・栗・竹を使い、門口に向かいにして立てた(山目地区)」、「切ってきた松を玄関の左右に飾りその間にしめ縄を張る(旧東磐井地域)」など、家や地域それぞれの形態で年神様の依り代を用意してきました。

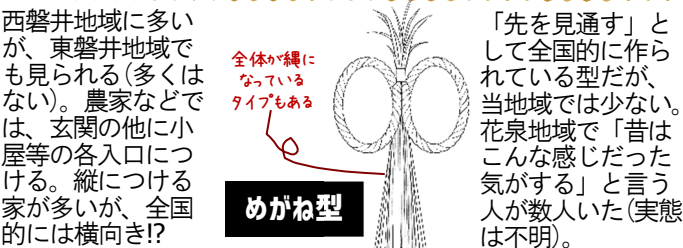
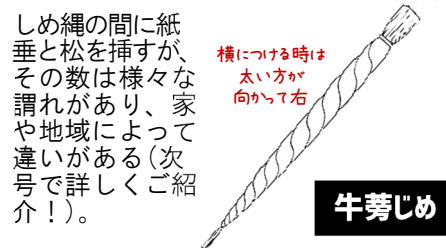
現在でも門松を門柱や玄関に用意する家が当地域内に確認できますが、「年神様の依り代」という意識で門松を用意する家は極少数というのが実態です。ただ、年神様の御神像(御札のようなもの)を神棚等にお迎えする家は多く、年神様信仰そのものは各家で継承されているようです。

■「しめ縄」から「しめ飾り」へ

門松と同様、年神様を迎えるにあたって準備されるのが「しめ飾り」です。自分の家が年神様を迎えるにふさわしい神聖な場所であることを示す、もしくは不浄なモノを寄せ付けないために、玄関や神棚、床の間などに「しめ縄」を張ったのが始まりといわれます。

かつては、家長が「しめ縄」を張る役目を担いましたが、時代と共に簡略化され、「しめ飾り」になったのだとか。「輪飾り」や「牛蒡じめ」などが「しめ飾り」のオソドックスなものです。そこに年神様への「お供え」要素を加えたものや、デザイン性を持たせたものなど、現在では「商品」としてスーパーマーケット等でも販売されています。

当地域では、「しめ飾り」に若干の地域性が見られ、東磐井地域では「しめ縄」に「サゲ」をつけ、松や「紙垂(しで)」等を挟み込んだものが多く、西磐井地域では先述のタイプがほぼ見られない代わりに、「牛蒡じめ」が多いようです(下記参照)。



西磐井地域に多いが、東磐井地域でも見られる(多くはない)。農家などでは、玄関の他に小屋等の各入口につける。縦につける家が多いが、全国的には横向き!

「先を見通す」として全国的に作られている型だが、当地域では少ない。花泉地域で「昔はこんな感じだった気がする」と言う人が数人いた(実態は不明)。

<参考文献> ※福田アジオ・菊池健策・山崎祐子・常光徹・福原敏男(2012)『知っておきたい日本の年中行事事典』/ ほか(誌面スペースの都合上、協力者含め誌面では割愛させていただき、当センターホームページにて掲載します)

次号ではさらに詳細な調査結果をご紹介します!